

資料 2

霊長類の体幹および四肢筋の比較形態学的研究

児玉公道, 川井克司 (熊本大・医・第一解剖)

胴体の続きであると共に頭部へ続く場所である頸部の体壁構造が、どのような特徴を持っているかを明らかにする目的で、頸部側壁筋である斜角筋群の神経支配様式を精査した。その結果、ヒトでは前斜角筋には通常C5からC7分節の枝が神経束基部の腹側から出て分布するが、中斜角筋には(C2)C3からC8分節の神経束基部背側から出る枝(背側枝)が広範囲に分布するだけでなく、前斜角筋筋枝とはほぼ同じ所から出て腹側を上行し神経束を越えて分布する枝(腹側枝)もある。この枝の分節はC5あるいはC6からC8が一般的である。また中斜角筋を支配する背側枝で下位分節C7, C8のものは中斜角筋筋枝を出した後貫いて後斜角筋や上後鋸筋にも分布する。次に霊長類の中で前斜角筋を持たない原猿類のエリマキキツネザルでは、3つの部分に区別できる中斜角筋にはC4からC8分節の背側枝だけが分布し、腹側枝は存在しない。一方前斜角筋を持つ新世界猿のクモザルでは、前斜角筋筋枝はC5~C7、中斜角筋には背側枝がC2からC8まで存在すると共に、腹側枝がC4からC7に存在する。後斜角筋の存在は非恒常であり、特に原猿類や新世界猿には存在しない。

これらの所見と肋間神経の肋間筋筋枝の形態とを比較すると、前斜角筋は最内肋間筋に、中斜角筋は内肋間筋由来と外肋間筋由来の複合であり、後斜角筋は外肋間筋から派生した肋上筋に相当すると整理できる。

以上頸部の斜角筋群の特徴は1)中斜角筋の外肋間筋と相同の部分は恒常であり、2)中斜角筋の腹側枝に支配された部分は前斜角筋が存在する動物では存在し、無い動物では消失するというように互に密接な関係があり、3)後斜角筋は肋上筋同様不安定な筋である。

尚類人猿以外で恒常な長斜角筋は、肋間神経を受ける複合型と頸神経のみの滑り出し型の二成因が考えられる。

資料 3

霊長類の尿臭気成分の化学形態計測および行動に関する研究

二木安之 (信州大・医)

報告書未提出